観察した鳥類チェックリスト（分類表記は鳥類目録第8版に従う）

★カモ目
・カモ科
□ オカヨシガモ
□ ヨシガモ
□ ヒドリガモ
□ マガモ
□ カルガモ
□ ハシビロガモ
□ オナガガモ
□ コガモ
□ ホシハジロ
□ キンクロハジロ
□ ミコアイサ
★キジ目
・キジ科
□ キジ
★カイツブリ目
・カイツブリ科
□ カイツブリ
□ カンムリカイツブリ
□ ミミカイツブリ
□ ハジロカイツブリ
★ハト目
・ハト科
□ キジバト
★カツオドリ目
□ カワウ
★ペリカン目
・サギ科
□ ヨシゴイ
□ ゴイサギ
□ アマサギ
□ アオサギ
□ ダイサギ
□ チュウサギ
□ コサギ

★ツル目
□ クイナ
□ ヒクイナ
□ バン
□ オオバン
★チドリ目
・チドリ科
□ タゲリ
□ ムナグロ
□ コチドリ
・セイタカシギ科
□ セイタカシギ
・シギ科
□ タシギ
□ イソシギ
・タマシギ科
□ タマシギ
・カモメ科
□ ユリカモメ
□ セグロカモメ
□ オオセグロカモメ
★タカ目
・ミサゴ科
□ ミサゴ
・タカ科
□ トビ
□ チュウヒ
□ ツミ
□ ハイタカ
□ オオタカ
□ ノスリ
★ブッポウソウ目
・カワセミ科
□ カワセミ
★キツツキ目
・キツツキ科
□ コゲラ

★ハヤブサ目
・ハヤブサ科
□ チョウゲンボウ
□ ハヤブサ
★スズメ目
・モズ科
□ モズ
・カラス科
□ カケス
□ オナガ
□ ハシボソガラス
□ ハシブトガラス
・シジュウカラ科
□ ヤマガラ
□ シジュウカラ
・ヒバリ科
□ ヒバリ
ツバメ科
□ ツバメ
・ヒヨドリ科
□ ヒヨドリ
・ウグイス科
□ ウグイス
・エナガ科
□ エナガ
・メジロ科
□ メジロ
・ヨシキリ科
□ オオヨシキリ
・セッカ科
□ セッカ
・ムクドリ科
□ ムクドリ
・ツグミ科
□ シロハラ
□ アカハラ
□ ツグミ

・ヒタキ科
□ ジョウビタキ
・スズメ科
□ スズメ
・セキレイ科
□ キセキレイ
□ ハクセキレイ
□ セグロセキレイ
□ タヒバリ
・アトリ科
□ カワラヒワ
□ アトリ
□ ウソ
□ シメ
□ コイカル
・ホオジロ科
□ ホオジロ
□ カシラダカ
□ アオジ
□ オオジュリン
□
□
□
□
□
（外来種や家禽）
□ コブハクチョウ
□ バリケン
□ ガチョウ
□ アヒル
□ ドバト

このパンフレット持参で
てがたん参加者の方は
当日、博物館入館無料です

てがたんは毎月第２土曜日午前１０時から　＊連絡先　我孫子市鳥の博物館　電話04-7185-2212

【10 月のテーマ】

「毒」と「薬」は使いよう

案内人：小泉伸夫・石原直子（鳥の博物館 市民スタッフ）



▲ 植物全体にアルカロイドなどを含むヨウシュヤマゴボウ。黒い実は染料として使われる。食用の「山ごぼう」と称されるモリアザミとは別の植物で、大量に毒を摂取すると嘔吐や意識障害を引き起こし、最悪の場合死に至る。

今月のテーマは毒についてです。

身近な生き物には、身を守るためや狩りをするために毒を持つものがいます。生き物が持つ毒の中には、生薬や染料の材料として、昔から人々の暮らしに役立ってきたものもあります。

今回は、自然の中の毒と、人々の生活との関わりについて考えましょう。

2026 年 10 月 10 日（土）

車や自転車に注意しましょう。水田や私有地ではマナーを守って観察しましょう。

観察会の後 (13:30 ～ 15:00) には、室内イベント「自然の材料から作ろう！中世のインクと江戸時代のシャボン玉」を実施します。ぜひご参加ください！

「身の周りにある生き物の毒」

※ 当日見たものをチェックしましょう。

☐ ヒガンバナ（ヒガンバナ科）

鱗茎には嘔吐や神経麻痺を引き起こすアルカロイドを含みます。鱗茎はデンプンも含み、毒抜きして非常食にも使われました。



☐ ジャコウアゲハ（アゲハチョウ科）

幼虫は食草のウマノスズクサに含まれるアリストロキア酸を蓄積し、成虫も引き継ぎます。毒は腎毒性や発がん性を持ちます。



☐ ランタナ（クマツヅラ科）

南米原産の園芸種。種は嘔吐や腹痛を引き起こすランタニンを含みます。鳥は実を食べますが、種は消化せずに排出します。



☐ セグロアシナガバチ（スズメバチ科）

ハチ毒にはペプチドなどが含まれ、狩りや防御に使われます。人が刺されるとアナフィラキシー症状で死に至ることもあります。



☐ トキワサンザシ：ピラカンサ（バラ科）

バラ科の果実は、熟す前は青酸配糖体が多く、食べると体内で有毒ガスが発生します。毒が少なくなる冬は、鳥が好んで食べます。



☐ アマガエル（アマガエル科）

カエルの仲間は、皮膚の粘液に弱い毒があり、外敵や細菌から体を守ります。ヒキガエルは耳腺と皮膚から強い毒を出します。



使い方によっては「毒」にも「薬」にもなるもの

①タンニン酸を含む植物

ドングリや熟す前のカキ、茶葉には、ポリフェノールの一種であるタンニン酸が含まれています。タンニン酸は、粘膜を収縮させる効果が強く、葉や実を口にすると渋みを感じたり、消化機能に障害を与えます。タンニン酸は、古くから下痢止め効果が期待され、革製品のなめし剤や茶色の染料としても使われています。



▲ シラカシの実



▲ 熟す途中のカキの実

②サポニンを含む植物

エゴノキやムクロジは苦みや泡立ち成分のサポニンを多く含みます。サポニンは胃やのどの粘膜を刺激することから、痰切り薬に使われています。魚への毒性も強く、昔はサポニン液で魚を弱らせて捕まえる漁が行われていました(現在は禁止)。



▲ エゴノキの実



▲ ムクロジの実 (小泉さん撮影)

③生薬となる植物

日本薬局方には、生薬となる植物が約170種掲載されています。身近な植物には、ヨモギ(血行促進)やドクダミ(抗菌作用)、クズ(解熱・鎮痛作用など)、クチナシ(消炎作用)があります。生薬には効能以外の成分も含まれるため、一般の人が薬として使うには注意が必要です。



▲ 脂肪減少作用のあるクズの花